

## 論文審査の結果の要旨

氏名 ゴロウィナ クセーニヤ

ゴロウィナ クセーニヤ氏の論文、『日本人男性と婚姻関係にあるロシア人女性移住者の文化人類学的研究 ― エイジェンシーの視点から見たライフクラフティングの過程』の目的は、現在日本に居住する、日本人男性と結婚をしたロシア人女性たちの、人生の設計と遂行、すなわち「ライフクラフティング」のプロセスを考察し、彼女たちにとっての「越境」と「結婚」のありようと価値付け、その意味を探求することである。本論文のデータは、2008年1月―9月、2010年1月―2011年2月に東京都・新潟市・富山市で行われた文化人類学的調査によって、主として50人のロシア人女性インフォーマント、またそれを補足するものとしての20人のインフォーマントから得られたものである。調査方法として用いられたのは、個人面談、ロシア人女性が多く集まる集まりなどでのインタビュー、参与観察と、関連組織での聞き取り、ロシアでの文献調査などである。

序論と第1章では、本論の目的、議論の背景となるポストモダニティの特質、エイジェンシー論について説明を行い、ロシア人女性、引いては現代女性全体にとっての結婚、ジェンダーの問題を概観する。第2章では、現代ロシアにおける女性たちを取り巻く歴史・社会・経済的環境、ジェンダー的状况に焦点を当て、「ビザ取得」の困難をめぐる一連の現象、また、比較検討の事例として、エジプトでのロシア人女性の結婚を取り上げ、ロシア人女性の向上戦略について述べる。第3章では、日露間移住の歴史的な形成・実践について述べ、日露関係の歴史性が、彼女たちの移住パターンに与える影響について考察する。また、異なる出身地と学歴によって、どのような移住後の差異があるかを分析する。第4章では、女性移住と国際結婚に関する先行研究を検討して、その「国際性」がとる形を明らかにする。

第5章からは、彼女たちの語りの資料を中心として、彼女たちの越境経験を描き出す。その中で、彼女たちの移住動機として再構成された「エスニシティ」が、日本でのアイデンティティ構築にどう関与するかを考察する。また、ロシアにおいて高齢のロシア人女性たちが公園などの「ベンチ」で時間をつぶす社会現象を、対象女性たちの日本における経験を理解するのに役立つ象徴として取り上げる。第6章では、日本人男性との愛情表現に関わる葛藤やセクシュアリティについて、現代日本における結婚の形態を論じながら考察する。第7章では、対象者の来日前後の教育と職業を背景に、日本に来てからしばしば陥る「引きこもり」とも表現できる状態と心理を探り、内面から彼女たちの

エイジェンシーを抑制する構造的機能について考察する。この議論の過程で、移住者にとって必要である「移動のリテラシー」という概念について、また、移住者の仕送りについて記述し、そこから彼女たちとロシアの家族（両親や兄弟）との関係について論述する。第8章では、移住における「逃避」の要素を大きな背景枠組みとして、インフォーマントの一部に見られる、日常における「引きこもり」や破壊的な行為、生活習慣の乱れなどについて、事例を挙げながら議論を行う。第9章では、来日前後に生まれた彼女たちの子供に焦点を当て、子供をめぐる彼女たちの行動から、自分の願望を仮託する「責任転嫁」の側面を明らかにする。結論である第10章では、彼女たちの将来の夢について考察し、幾つかの方向性を見出しながら、ポストモダニティの過渡的な性格が彼女たちに与えている影響を考える。最後に、日本人男性と婚姻関係にあるロシア人女性移住者の、日本におけるライフクラフティングの検討を通して、彼女たちが置かれた多くの矛盾を含む状態が、どのように変化しうるものかを考察する。

審査では、ゴロウィナ クセーニヤ氏が調査したロシア人移住者たちのさまざまな生き方が全体の傾向をどの程度表しているのか、内面の心理にまで踏み込む方法が有効であったか、この研究が現代ロシア研究に収斂するのか、もしくは日本社会研究として意味を持つのか、といった質疑がなされた。それに対して、調査対象者たちの多様性は、全体の傾向を示すのに十分である、語りのレベルにおいて表現されている彼女たちの意識は解析されうる、日本という社会環境におけるロシア人移住者の研究であって、他の社会での適応との比較は次の課題である、といったことが確認された。

審査を通じて、前記の内容を持つ本論文は、以下の三点において、文化人類学に対する貢献が顕著であることが明らかになった。第一に、日本国内に散らばって住むロシア人女性を丹念に調査し、一つのデータ群を収集したフィールドワークとその成果のエスノグラフィーは、濃厚で迫力を持ったものであり、移住者研究に一級の資料を提供した。第二にグローバリゼーションの趨勢の中での越境という現象が、私たちに何を与え何を可能とするのか、という点をロシア人女性を対象に鮮やかに描き、現代のポストモダン状況の理解を前進させた。第三に、ロシアからの女性移住者たちが、結婚を一つの契機として「停滞」に陥るといった特異な現象から、女性のエイジェンシーに関する議論を逆照射するかたちで、調和的な結論に留まることなく、正確に現状を見据え、将来を展望する議論につなげた。

むろん、審査員から指摘された、理論的枠組みが、必ずしもデータの複雑さをとらえ切れていない、といった憾みはあるが、本論文の持つ価値は、十二分に高いものがあり、本論文は文化人類学の研究に対して重要な貢献をなしていると判断された。したがって、本審査委員会は、全員一致で、本論文提出者は博士（学術）の学位を授与するにふさわ

しいものと認定する。